

旧植民地に残った文化遺産

—台湾大学所蔵「田中文庫」について

現代中国学部助教授 黄 英 哲



ドイツの文化史家で文芸理論家でもあるヴァルター・ベンヤミン (1892～1940) に、蒐集という行為について語った講演「蔵書の荷解きをする」(『ヴァルター・ベンヤミン著作集』11所収 晶文社)がある。

彼は、「蒐集家の意識のなかでは、一冊一冊の本の一番重要な運命は、自分自身との邂逅、自分自身の蒐集品との邂逅である」といい、自分自身の本の入手方法やいきさつについての体験を追憶している。邂逅の場はオークションであったり、古本屋の店頭であったりさまざまだが、数千冊の蔵書を有していた彼には、それと同じ数の本との記憶があったのだ。

1998年、台湾大学は創立70周年(台湾大学の前身である台北帝国大学は1928年の創立)を祝い、記念行事の一つとして新しい総合図書館を建設し、その落成式を挙行了した。総合図書館は、今日の大学図書館が誇る貴重なコレクションの多くが、実は植民地時代の台北帝国大学附属図書館の初代館長であった田中長三郎が努力のたまものであったことを顕彰し、田中個人のコレクションを「田中文庫」として整理し、公開展示した。

田中長三郎は1885年(明治18年)神戸で生まれ、1976年(昭和51年)享年91歳で没した。田中は1907年(明治40年)に東京帝国大学農学部に入學し、熱帯農学と熱帯園芸の著名な学者となった。とりわけ柑橘類の研究では大きな成果を残し、のちには農学博士と理学博士の両方の博士号を得ている。彼は、九州帝国大学農学部講師、宮崎高等農林学校教授兼図書館長を務めた後、1927年に台湾へ渡り、台湾総督府台北高等農林学

校教授、台北帝国大学附属農林専門学校教授となった。1928年に台北帝国大学が創設された後は、理農学部「農学・熱帯農学第二講座—園芸学」の教授に就任し、1929年から1934年まで、大学附属図書館の初代館長を兼任した。

彼は館長だった時代、「伊能文庫」、「上田文庫」、「長澤文庫」、「ユアール文庫」、「桃木文庫」、「烏石山房文庫」などの重要コレクションを購入し、これらのコレクションは現在もなお大学附属図書館に大切に保存されている。

彼の蒐集行為として、最も著名な話は、1930年に田中が父田中太七郎の遺産10万ドル(今日の日本円に換算すると7億円)で、イタリアにて開催されたオークションに亡父が創設した神戸銀行の名義で参加し、ドイツの著名な植物学者で蔵書家でもあるオットーアルベルト ユリウス・ペンツィヒ(1856～1929、元ジェノバ大学教授、柑橘植物学・解剖学・病理学の著名学者)の個人の蔵書を落札したことである。このコレクションの中には、ペンツィヒと同時代の著名な植物学者で蔵書家のE.F.ノーテルなどの旧蔵書も含まれており、これらはペンツィヒの死によって売りに出されたのである。コレクションの内容は、植物学や園芸学に関する古典的な名著が多くを占めるほか、その他の、たとえば哲学・歴史学・言語学・文学などのジャンルの貴重書もある。とりわけ価値があるのは、西洋印刷技が発明されたばかりの、挿監期というべき時期に刊行された四冊の善本書であり、そのうち最も年代が古いのは1480年に出版されたものである。このほか、繊細かつ色鮮やかでみずみずしい手書きの植物図譜も多く伝わっている。植物分類学の草創の時期には、自ら植物の形態を図に写し取

る能力が植物学者として必須の条件だったのである。田中は、個人資産で、個人の専門分野を通じた収蔵を行ったのであり、彼は図書館長を務めていた任期中、これらの重要コレクションを編目に分類した。その後さらに彼個人の蔵書を加えたものが、今日の「田中中文庫」なのである。

戦後、田中は日本に帰り、東京農業大学教授、大阪府立大学農学部教授などを歴任したが、その個人的な蔵書は、全て台湾大学に残されたままで、総合図書館、研究図書館、園芸学科図書室などに分散していた。50年代、田中は一度台湾大学に戻り、個人の蔵書を回収しようとしたが、国際法の問題があり果たせなかった。一方、台湾大学は1997年になってようやく「田中中文庫整理計画」をスタートさせ、翌年、『国立台湾大学図書館田中中文庫蔵書目録』が完成した。正式な統計による

と「田中中文庫」の図書は、中国語と日本語の書籍が163種190冊、英文が464種565冊、その他の十種類以上のヨーロッパの言語による図書が1,819種2,571冊で、その多くは植物学や園芸学に関する古典的な学術書である。「田中中文庫」は、現在、新たに建設された総合図書館にすべて集められている。

田中のコレクションは、とりわけ柑橘の分野で、台湾の植物学と園芸学の研究に大きな貢献を果たした。しかし、彼自身の立場や研究・コレクションが植民地後の台湾においてどのように扱いをうけたかということ、さらに近年の再評価については、実はさまざまな歴史や文化の記憶という問題もあって、深く考えさせられるところである。

「田中中文庫」は、ペンツィヒ、ノートル、田中ら蒐集家の記憶、およびポストコロニアル時代の台湾の記憶の総体なのである。

